



作らない



川崎ゆきお

「最近調子はどうですか」

「あまり作らんようになったねえ」

「名工が、もったいない」

「いや、作っていますよ」

「安心しました。引退されたのかと思って」

「こういうのには引退はないよ。人間国宝もないがね」

「新しいジャンルですからねえ」

「まあ、お茶でも飲んでいきなよ」

老工は作業場の隅にある小さな冷蔵庫から麦茶を取り出した。

「もう寒いがね、冷たい麦茶で気合いを入れるんだ。飲み過ぎると、腹が張るがね。だから、ほどほどに飲むんだ」

「マラソンランナーが給水するようなものですね」

「そうそう。これには好みがあってねえ、スペシャルドリンクだ。しかしねえ、最近私は思うんだが、ただの水でも良いんじゃないかってね。これならいくらでも手に入る。作るも何も無い。水道の水で良いんだ。最近消毒臭がなくなっているから、そのまま飲めるよ」

「はい」

「で、何の話だっけ」

「最近調子はどうですかっ……とご機嫌伺いです」

「もう、君の師匠じゃないから、いいよ、そういう義理は」

「いえいえ、まだ学ぶことがありますから」

「そうかい。じゃ、少しだけ話してやろうかい」

「お願いします。でも手を止めて、大丈夫ですか」

「なーに、こんなもの、もう作らなくてもいいんだから」

弟子は、作りかけの作品を見る。工作ものだ。

「どうだい、分かるかい」

「分かりません。でも以前と違ってきてますねえ」

「ああ、だから、最初に言っただろ。作らないようにしているって」

「はあ」

「だから、もう師匠じゃないんだ。そんなもの君が真似ても仕方がないだろ」

「これって、普通ですねえ」

「君もここに来たときは、こんなのを作っていただろ」

「はいはい。一番最初に作ったのは、こういう作り方でした」

「釣り人は鮒釣りに戻る」

「フナですね。一番最初にやり始める」

「そうそう、そしていろいろやってきた結果、最後はまた鮒釣りに戻る」

「はい」

「ただ、これは漁師じゃない。プロじゃないからできるんだよね。鮒なんて釣っても、何ともな

らんだろ」

「それで、師匠も鮎釣りに戻ったということですね」

「もうネタはないしね。新奇なもの珍奇なもの、変わり物や、飾りすぎ、また精緻な物、趣向の凝らしすぎ。まあ、全部やったよ」

「その心境は」

「何でもないものに目覚めたんだよね」

「それは千利休のような心境ですか」

「そんな上等な考えではない。面倒くさくなっただけだよ」

「それだけとは思えませんが」

「それは、私が君の師匠だからだ」

「はい」

「しかしねえ、何でもないものは飽きない。最初から飽きているからね」

「はあ」

「それを発見したんだ」

「そうですか」

「だから、そんなもの、君は見倣う必要はないから、もう師匠じゃないと言っただろ」

「そうですねえ、こういうの値が付きませんからねえ」

「そうだろ」

「残念ながら、僕にはその味わいが分かりません」

「分からない方が良くないだ」

「はい」

弟子は麦茶を飲み終えた。

「今度来た時は水になっているからね」

「名水のミネラルウォーターではなく」

「そうだ」

了